

不在の街

墓参りをすました帰り、街へおりてくるからと起ちあがった葛野に、

「街に行つてなにしますか、車に轢かれてもしたら、妙な人が死んだるいうて、人がたかりますよ」と、母は薄暗い電光の下で、おち凹んだ眼を硝子玉のように光らせながらいった。小さく老いた母は踏みつぶされた折紙人形のように皺くちやだった。

「車に轢かれたら滅茶滅茶になりますから、妙な体をした人間かどうかわからなくて、かえつて都合がいいでしょう」

葛野勉はあがりがちで靴の紐を結んだ。母が葛野に妙な人がというのは、彼の不具への指摘だった。

「おうちがいうように都合よくは行きませんよ。都合よくいっても死体は家族がひきとりに行かんといけません、そんなところには誰も行つてはくれませんよ。恐ろしゆうして……」

母は膝に手を重ねておいたまま、落着きのない眼で息子を眺めた。母にとつて家で息子をみるのは三十年振りなのだ。それまで葛野が母と会うのはいつも癩療養所のなかの面会室だった。

「そんなときは関係がない顔をしていたらいいですよ。警察が調べて療養所に連絡してくれますから」

土間で二、三回靴を踏みしめ、葛野勉は線香とローソクを手にとり、あらためて家のなかをみまわした。

柱には彼がうまれる以前からあったと教えられている柱時計が、コチコチと律義に振子を動かしていた。父が街の古道具屋から買ってきた時計で、ドイツ製だった。母にいわせると百年以上はたっている代物で、いまでも調

子は少しも狂わないらしかった。文字盤の外側は八角形の木枠で飾られていて、時を示す文字はアラビア数字である。

天井の煤け具合や壁の剥げ落ちはいっそうひどくなっていたが、家そのものの形は変わっていなかった。仏壇も、床の間の南部鉄の花器も、筆筒も、彼の子ども頃のままなのだ。変わったものといえばかまどがこわれてガスレンジになっており、電気炊飯器が粗壁を背景に据えられているくらいのものであった。

家のなかはずっと狭いように感じられ、あがりがちが低くなったように思えるのは、彼の体が大きくなったせいである。彼は十歳までこの家にいた。その頃母は四十代のはじめで、父も健在だったのだ。

玄関を出ると戸外は月夜でもないのに嫌らしい明るさが、庭にくっきりと竿竹の影を刻みつけていた。家のまえには石垣を築いた段々畠がはつきりみえている。そして段々畠の上には、城塞のようなホテルが建っていた。少年の日、この山の上で葛野は陣取りや草すべりをしながら、港に出入りする船を眺め、夢を育てたのだ。

コンクリートの兜をかむせられたような山は、昼も夜も車の排気ガスにつつまれ、夜は深夜までつづくライトの照射をうけていた。月夜のように庭が明るいのはホテルから溢れる光のせいなのだ。

山は喘息病みのようにくるしげだと呟いて葛野は、爪先の垂れている片足を操って門口の石段をおりた。

靴底にあたる道はコンクリートで固められていた。雨が降ればぬかるみになり、雑草が生い繁っていて、朝などは露で、藁草履がじっとりぬれてしまうような道だったのだ。道の下の畠には甘藷や麦が季節を変えてつくられていたし、畠の隅には大きな肥溜めがあんぐりと口をあけていた。

肥溜めがあったあたりにはいまは兄の家の炊事場の小窓が、小さく明りを点していた。兄の家は、葛野が帰ってきていることを知っていて、息をひそめておし黙っていた。兄にはすでに四人の子がいて、孫までいる。兄の家の向こうには野崎の家の屋根がわずかにみえていた。礼子という女の

子がいて、便所の窓から顔を出して、テルテルボウズ、テルボウズとよく唄っていた。

道の途中で葛野は兄の家へおりて行く若い娘と擦れちがった。肩までひろがった髪をゆすって、娘は爽やかな足音を残して石段をおりて行った。葛野はその娘をふりかえって、次女なのだろうと考えた。葛野が療養所に行つてから産まれた長女はすでに結婚し、子どもが二人もいるというのだ。姪の産んだ子はどう呼ぶのだろうかと考えながら、彼は車の往來の頻繁な道路に出た。擦れちがった娘の体には彼と同じ血が流れているはずだが、生ぐさい血の匂いはなぜかしなかった。

車が走っている道路に出ると、眼下の闇のなかに街の灯はきらめいていた。鶴の港といわれる港には大小の船の灯影がゆらめきつづけ、対岸の山の稜線の上に見えるテレビ塔の灯は城のようだ。光の城は闇のなかに浮かんでいた。それは葛野を見知らぬ街へきた旅人の感情とは異なった哀愁に誘った。彼がいた頃には、彼がいま立っている道を車が走るようになるとは夢にも考えられなかったのだ。なかば焼跡だった街は貧しい灯を瞬かせているにすぎなかった。

葛野は道端にたつて摺鉢の底のような街に眼をやっていた。港と街の情景を背に彼は少年へ育つた。学校へ通うときも、陣取りをして遊んでいたときも、港と街は役者にとつてなくてはならぬ舞台装置のように、背景として在つたのだ。野崎の家から礼子が、ツトムちゃん、ツトムちゃんと呼ぶときも、彼女が歌を唄っていたときも舞台は同じだった。

背景の絵がちぐはぐになったのは、彼が癩になつて療養所にはいるよう命令がきたときからだ。教科書を詰めたランドセルを背負つて彼はこの街を出た。目を泣き腫らした母は彼の手を汗が滲むくらいにしっかりと握りしめていた。母は彼が生きてこの街に帰ることがないと思つていたので。

船の灯影と街の灯が葛野の目のなかで熱くとめどなく崩れはじめた。異郷で、病氣にのたうち、他人のなかで生きた三十年は、自分の人生ではなかつたような気がした。

車が走っている舗装路は迂回して街へおりていたが、葛野はそこから旧道へ入った。旧道は石畳を二列に敷いた道で、墓原という墓場地帯をつきぬけると、急斜面の石段となっていた。彼は前へつんのめるような格好で石畳を踏んだ。

地藏堂の建っている辻までくると街の灯は手掴みに出来そうな距離にみえた。街の雑踏がざわめきとなって風と一緒に吹きあげてきた。そこに立つと自動車のクラクションの音もききわけられ、人家の窓もすぐ足もとにあった。広告灯の七色の光が高く低く点滅し、デパートや銀行の文字もはっきり読めた。対岸の山裾の灯は宝石をちりばめた王冠だった。

葛野はふかい嘆息をもらして道端の地藏堂をかえりみた。門扉もはまっていないうらんだりの地藏堂だったが以前のままだけい口をひらいていた。一年に二回祭りがあって、その日は地藏堂のまえには赤い幟がはためいていたものだ。子どもたちが参りに行くと講の婦人たちが掌に干菓子のをせてくれるのが常だった。堂の内部には石地藏が三体祀ってあったが、地藏の裏には子どもたちがビー玉やカードなどを隠しておく秘密の洞穴があった。学校帰りに洞からビー玉やカードをとり出しては、ランドセルを投げ出して遊び興じたものだった。

ビー玉をはじき合い、カードをうちつけ合って遊んでいた頃は、彼はまだ癩の自覚をもたなかった。

戦争も終わりに近い頃は、甘藷のなかに米か麦が点々とみえる主食に、大根の葉っぱなどの漬物がおかずだった。そうした食事が毎日つづいた。スプーン一杯の砂糖もなかった。ときに腐りかけた鯛が一人一匹当て配給になっていた。運動靴一足買える店もなく、すりきれた藁草履を履いて子どもたちはべたべたと歩いた。

学校では菜園づくりと家禽飼育と剣道が主な授業内容だった。始業のベルが鳴ると二列縦隊になって街路へ馬糞や牛糞をひろいに出かけた。馬も牛も消化不良をおこしていたのか、糞はべたべたと路面にくっついていてそれを素手で掻き集めさせられた。

糞ひろいが終わると山の上の畠に堆肥と一緒に運ばされた。寒稽古は霜のひどい朝素足で街を走った。

学校には二宮尊徳像が建てられていた。背中に薪を背負い、手には読本をひらいている像であった。

ほしがりません

勝つまでは

と習字の時間に書かされて、それを先生にほめられ羞恥したことを葛野は療養所のなかでもよく思い出した。そして運動靴などが自由に買えるようになったと知ったのは、療養所にはいつてからだだった。

地藏堂から右下へおりて行くと、道端すれすれに屋根瓦が接近している家があった。むくげの生垣に体をおしつけて縁側のほうをのぞくと、蛍光灯の光が明るかった。テレビの音がしていた。

この家の庭には築山をこしらえた浅い池があった。金魚を買ってきては池に放して遊んだものだ。葛野と同級の加藤広守の家だった。

みんな広守のことを、「ヒロン、ヒロン」と呼んでいた。葛野は「ツトムちゃん」と呼ばれたのに、彼は「ヒロン」としか呼ばれなかった。家の貧乏は同じようなものだったが、中耳炎を患っていたせいか、彼はひどくぼんやりしているろまだった。そしていつもじくじくした耳垂れを出していた。

葛野は彼を「ヒロン」と呼ばず「ヒロンちゃん」と呼んでよく遊んだ。耳がわるくて、彼がのろまだったとしても、病気だったら、「耳垂れが臭いとかきたない」とってはヒロンちゃんが可愛相だ」と葛野は子ども心に考えていた。

「加藤さんところの、おうちとよく遊んでいましたヒロンさん、もういい息子と娘がおりますよ。大工になっていて、どうして金とりも羽振りもいいそうですよ。街に親子で行くときはシャンシャンしていて、この間は葛野の婆ちゃん元気ですかといってくれましたが、しばらくは誰か見知らぬいくらいでしたよ」と母は急に腫れぼったい顔になって、膝に置いて組ん

だ指を綾とりをしているように、ひるがえした。母は加藤広守の、金とりがよく生活が安定している姿を、シャンシャンしているという言葉によってまとめ、強調した。

「そうですか。あのヒロンちゃんかねえ。でも、みんなが立派に生活しているというのはいいことですよ」

母にとっては葛野の癩は放蕩と同じように手のつけられない、情ないことかも知れぬと考えながら彼はいった。

むくげの生垣から身を離すと彼は、こんばんは、と加藤広守の家の戸をあけてみたい衝動を覚えた。療養所のなかで彼は幼友達だった誰彼をよく想った。彼らが夢のなかに登場してきたあとの目醒めは、ひどく疲れを感じるものだった。望みもしないのに他郷へ追いやられた身は、流刑人のそれであった。

彼の療養生活はいまも終わっていないなかった。医師は病菌はいなくなっているといったが、不具の彼をひきとってくれる人間も土地もなかった。

――今晚は。

――はーいッ。

といて三十七、八の女が出てくる。女は広守の妻で、下脛があかんべをしたようにまかれて、鼻も金槌でたたきつぶしたように歪んでいる葛野の顔を見て、一瞬呼吸を呑む。

――あのう、加藤君はおりますか。広守君は……。

――は、はあ。

――私はその葛野の家のツトムという者ですが。

――は、はい。

といて広守の妻は慌ててひっこむ。そして間もなく広守が玄関に出てくる。

――やあ。俺はツトムだが、憶えてるな。

それでも広守はぼんやりとしているが、

――はあ、ツトム、ツトムさん……。

と感情のこもらない声でいい、すぐ目をそらした。

葛野はそこまで想像して、再会劇の筋を組立てることをやめた。

二列に敷かれた石畳に靴音だけが硬く響いた。北風がその道を吹き過ぎ
ていた。

線香とローソクを握った手に無意識のうちに力がこもりそうになるの
を、彼は警戒した。

加藤広守の耳は治っただろうか。もう彼は黄緑色の垂らしてなどいな
いだろう。むしろ子ども頃のそうした疾病など拭い去ったように立派な
顔つきとなり、一家の主人としての貫禄と風貌をもっているに違いなかつ
た。学校の成績では二人の間にはまったく比較にならぬほどの差があつた
し、癩が発見されるまでは、葛野は校医から、体のどの部分についても、
要注意の指摘をうけたことはなかったのだ。風邪をひいたことも腹痛で学
校を休んだ記憶もなかった。

人生は癩に罹ったときから完璧なまでに狂っていた。そして四十になつ
ても葛野は不具の体を晒して孤独の身を生きていた。

近所の同級生のことは母からきかされたが、同級生のほとんどは、消息
がわからなかった。そのなかで療養所にはいつてから二人だけは、名前を
みたことがあった。角喜久子といった女生徒は、ひどく可愛くて、学校で
も目立つ女の子だったが、彼女が戦後はじめてのミス××に選ばれたこと
を、たまたま郷土の新聞を図書室にみに行ったとき知ったのだ。彼は
新聞の写真をみたとき、たった一度だけ彼女の家に遊びに行ったことのあ
るのを思い出した。呉服店の二階の部屋でなにをして遊んだか記憶になか

ったが、彼女は過敏症だったのか、手や肢に虫にさされた痕がいくつも赤くぶつぶつになっていたので覚えていた。その頃は日本中に蚤や虱がいっぱいいたのだ。

そんな彼女が十八歳に成長して、人口三十数万の市のミス××に選ばれていた。新聞に載っていた写真は、華やかな微笑を刻んで癩の彼をみていた。

もう一人、尼ヶ崎という床屋の息子がいた。彼は街に原爆が落とされた日、港で水泳中に閃光を浴びたらしかった。十五年後、彼が白血病で死んだことが、「今年一年に原爆症で死んだ人々」という特集をやっている週刊誌で報じられていた。葛野は尼ヶ崎のことは、彼の家の床屋に頭を刈りに行って、癩を察知されて断られたことから、よく憶えていた。尼ヶ崎和晶は円い顔写真を印刷されていた。遺族は妻と息子一人と書かれていた。

同級生たちがいま頃故郷の街でどうした生活を営んでいるだろう、という想像は、療養所に隔離され、人並の生活が出来ない境遇だけに、いつそうつよかった。それを想う暇だけはあるほどであった。彼らと会って懐しさを感じ合いたいと思うこともしばしばだった。生活をしている彼らには小学校時代の同級生のことなど思い出す暇はないことはわかっていた。彼らには中学、高校、あるいは大学と、同級生は数えきれないほどいるに違いないからだ。小学校の途中で、ある日とつぜん学級からいなくなった生徒のことなど、彼らが記憶しているはずもなかった。だが葛野にとつては人生が辛く孤独であればあるほど、彼らはかけがえのない人間として姿を現わすのであった。健康だった時代の友達というのは、葛野にとつて彼らだけしかないのだ。それは自分の意志で人生を生きる自由をもたなかった彼の、自由への渴望でもあった。

野崎礼子は葛野より一年上級だった。学校に通うようになってからは遊んだことがなかったが、実母は結核で死に、継母が彼女の小学五年のとき嫁いできたのだった。母が死んでから彼女はいつそう無口になり、継母がきてからはまったく笑顔をみせない女の子になっていた。

その礼子が最近夫や子どもと実家に帰ってきて生活しているというのだった。すでに義母に当る人も死んでいた。

彼女は母に葛野のことを、「勉ちゃんはどうなさっていますか、会ってみたいですわあ」と懐かしさをこめてきくらしかった。癩に罹って療養所に行っているとはきくものの、或る日忽然と姿を消して三十年間、帰ってもこなければ死んだ様子もない葛野の行方は、ミステリーのはずだった。さまざまの公害による難病の発生が後を絶たない現代だったが、三十年も治りもしなければ死にもしない病気とは、当人が療養所に隔離されたまま世間の目に触れない存在だけに、他の病気とは異なった奇異感を与えているのは間違いなかった。

「へエ。まだ生きていますですよ」

母は野崎礼子に致し方なくそうこたえたという。

母は他人から葛野のことをきかれるのが、身を切られるようにいまも辛いといった。母にとっては葛野が永生きしていることも、死んで葬式をしなければならぬ事態になることも、とにかく他人の口の端にのぼるようなことがすべて困ることなのだ。

それを考えると葛野は困惑にみちた苦笑を心にかべた。

山口さんちのツトムちゃん

このごろ少し変よ

とテレビからラジオかわからないが、あどけない歌声が道端の家からきこえた。葛野は療養所のなかでこの歌の詞を、山口さんちのツトムちゃん、もともと少し変よ、と替えてよく唄った。

石段をおりながら彼は、もともと少し変よ、と心のなかで唄ってみた。野崎礼子は便所の窓にのびあがって顔をのぞかせ、ツトムちゃん、ツトムちゃん、とよく呼んでいた。葛野が顔をみせない、みせるまで呼んでいたのだ。雨が降って外に出られないと、テルテルボウズ、テルボウズと唄っていた。結核で母親が寝ている家庭は、雨が降ると淋しかったのだらう。それを覚えていて彼女は葛野に会いたいというのだろうか。

しかし彼の母は、葛野が帰ってくることもあつたら一度会いたいという野崎礼子に、崩れた顔になっているのを陰口の種にするつもりでいうのだと、猜疑の爪を磨ぐのをやめぬのであつた。

道の両側は墓ばかりという陰湿な情景に変わった。頭上を掩う楠は風にざわめいていた。

そこらはずべて彼の記憶の壁にある風景と合致するものばかりだつた。道の曲り角も、石垣の上の桐の木も、少年の頃の距離感と現在のそれには相違があるものの、やはりそこに在つた。

墓地へ入って行くのに葛野には躊躇はなかつた。

葛野家之墓――と陰刻された墓碑は磨きこまれて新しかった。墓を建て替えたとき母は彼に帰省して墓参りするようになつてきたのだつた。それは最初で最後になるような予感が心を掠める手紙だつたのだ。

葛野は金箔の陰刻も鮮かな墓碑とすぐ横に建っている戦死した兄の墓碑に、ローソクをともし線香をたてた。墓碑は別であつたが骨を納める室はひとつにしてあるという。彼は指の曲つた手を合せ、死目にも合わなかつた父と、異国で死んだ兄に帰省を告げた。

墓を出ると葛野は二百を数える石段を下つて行つた。学校に行くのに石段を二段ずつとび越えて駆け下つた日々が、彼の脳裡にはいまもあつた。ランドセルのなかで筆箱ががちゃがちゃと音を立てていた。

寺の一画の高い石塀の間をぬけると、そこはすぐ街の灯だつた。街の一部は戦争中の疎開で崩され、瓦礫と化して行く様子を葛野はみていたことがあつた。まっすぐ行けば眼鏡橋に出る。橋の下には沙魚がいて、みみずを餌にして投げこむといくらでも釣れたものだ。

通りに立ってみると尼ヶ崎理容院という看板が角の石屋のまえに忽然と現われた。尼ヶ崎和晶は原爆症で死んだはずだから、いまは未亡人となつた彼の妻が道具を使っているのか、店は硝子箱に光を入れたように明るかつた。あるいは未亡人は生活と子どものため再婚し、面白おかしく暮らしているのかも知れなかつた。

尼ヶ崎理容院のまえの角には、以前の場所に仏具屋が、ウインドーのなかに金箔の仏像を飾って、厚板の看板をかけていた。石屋のまえには墓石に使う石材が、シャッターをおろした店のまえに積みあげてあった。尼ヶ崎の死は仏具も墓碑も隣りで間に合って都合がよかったろうと葛野は変なことを考えた。

通りに立っている葛野のまえを空車の標識をたてたタクシーがゆっくり通りすぎた。彼は車のあとに従うように道を曲った。道を百五十メートルほど行って左に折れると、彼の母校の小学校がある。

車が早いスピードでまた彼を追いぬいた。その風のおおりをうけたように彼は道路の中央に出た。母は馴れない街に出て車に轢かれたらどうするのかと心配していたのだ。いま頃母は彼の帰りが遅いといろいろの妄想につかまれて落着かないでいるように思われた。

母校へ折れる角にきたとき葛野は立ちどまり、ぼんやりした明りの向こうをすかしみた。しかし鉄の門扉のはまっているはずの三階建の校舎はみえなかった。昼間は子どもたちの声でふくらんでいるはずの学校は硬い沈黙にとざされている。

葛野は石畳の道に棒のようにつつ立ち、この学校に自分が通学したという証拠がどこに残っているだろうかと考えた。卒業記念の写真が保存されていたとしても、彼はその写真のなかにはいないのだ。死んだ生徒なら円くかこまれた顔写真だけでもあるかも知れなかったが、葛野の分はそうした写真もまったく残されていないに違いなかった。

それを考えたとき葛野は幼い日の自分が幻影だったような錯覚に陥り、そこになにをもとめるのか、と叱咤する声を自分のなかでできたのだった。

薄闇の路上につつ立っていた彼はそのときくるりとをかえして、急ぎ足に道を戻りはじめた。

紫煙が膝のあたりでもつれ、柱の時計が振子の音を刻んでいた。母は這いつくばるような格好で、食事の後片付けをしていた。葛野が手伝うといつてもきかなかった。

着物の裾をひきずり、腰を曲げて動く母をみているのに耐えられなくなつて、彼は仏壇のまえに坐つた。仏壇には曼陀羅がさげられ、弘法大師が祀られ、父と兄の位牌などがごちやごちや置かれていた。葛野が病気になるたとき仏壇にはありとあらゆる神仏が祀られていた。

位牌をみあげて葛野は、とうちゃん、と幼い頃のように呼んでみたい思ひにつきあげられた。

「おうちはどうしますか」

位牌をみていると、昨夜街から帰つた葛野に母がいったことが思い出された。

「どうするって、何のこと……」と葛野は母に向かい合つてそう問い返したのだつた。

「おうちが死んだことですよ。そのときは帰ってくるつもりでしょう」

母は着物についていた糸屑をとつて爪繰りながら皺のなかの目を伏せた。

「ああ、そのこと……」

灯明の瞬きを縫う香煙をみて葛野はいった。この世に頼の人生を生きるために産れてきたような生涯だつたと思う。

「死んでから帰ってくるといつても、おっかさんが骨をとりにきてくれなければ、兄貴はいっそうきてくれませんよ。骨になつて帰ってきてても仕方ありませんから、そのことはいいです。療養所には納骨堂もちゃんと準備してありますから」

乳房の間に顔を埋めて嗚咽し、そのやわらかな肌の温みにつつまれて眠りたいと、叶えられない願いをもちつづけて生きた人生でもあつた。

「でも、おうちも細か頃より他人ばかりのなかで暮らして、それがきつかつたでしょうから、死んだあとくらい帰ってきて、みんな一緒に入ったが

いいですよ。とうちゃんも、おうちが元気なら後を継がせて面倒ばみてもらうのに、それが残念だといって死になさったですからね。おうちはか頃からやさしい子どもでしたから。……野崎の礼子さんもそれをいつて会いたいというのですよ」といつて母は糸屑を爪繰っている手に涙を落とした。涸れた涙の袋からやっと出てきたような一粒の涙だった。

「そんなことはないさ。俺はもともとつめたかったよ」

葛野は指の曲った手をみて、この手の指がもとに戻らぬように、失った身も心も永遠に還ってこぬのだと考えた。

位牌から目をそらすと彼は家のなかをあらためてみまわした。鴨居の上には父がもらった武勲の賞状が煤けた額にかけられ、父と兄の写真もあった。天井には雨もりの汚点がひろがって、家は母の命とともに崩れ落ちるように思われた。

こんな家に老いた母を独り残して帰る気持がひどく切なかった。元気でさえいたら加藤広守のように羽振りのいい生活は出来なかったにしても、母に心残りをさせるようなことはなかったと思う。病気をひきずって葛野が独り生きていることにも母の口惜しい心が残るようであった。

「おうちはいまのように元気でいたら、六十までは生きるですよ」

母はむしろ心が重い様子でそういつた。苦勞して永生きするより、死んで楽になったがいいと思うのも、母のなかでは息子への真剣な愛だった。かあちゃんは勉と死んだがいいといつたこともあった。母は彼が自殺でもすると自殺そのものには悲しむとしても、どこかではほっとするようにも思われた。

「最近はおそこでも癌で死ぬ人が多いですから、そんなに永生きはしませんよ」

葛野が六十まで生きると母は九十を超えるのだ。いずれが先になるにしても、そんなに永いことお互につき合って生きることとは出来ないだろう。

「そういつてもわかりはしませんよ。……それでもおうちも体は大事にせんといけませんよねえ」と母はそういった。

灯明を消しながら葛野は、母は三十年振りに家に迎えた息子に母親としての情愛の示し方にとまどい、あのようなことをいったのだろうと考えた。幼い頃から他人のなかで育たねばならなかった息子への不憐と、そんな息子への愛しさと、息子を遠くへ隔てたものへの憎しみがごちゃまぜになって、死んだときはどうするのかなどという、残酷な言葉を吐かせたのに違いなかった。すでに彼の体からは母のなかにある息子の匂いとは異なった体臭が出ているのかも知れなかった。

それにしても四十になったばかりの息子に死後の始末と、それへの覚悟を問う母を葛野は一瞬残酷とも思ったのだ。療養所に送られたときも、朝目がさめてみると父も母もいなかった。きちんと畳まれた布団にはまだ匂いが残っているような気がするのに、父と母は息子に別れもいわず、元気にしているよともいわずにいなくなっていたのだ。おそらく父と母はそうして帰る自分たちを責めながら、それでもそうすることがもつともいいと考え、目を抑え、逃げるように急ぎ足で帰って行ったに違いなかった。葛野が癩と診断されたとき大病院の白壁に縋りついて声を放って泣いた母だった。それから母は一年に一回は面会にきたのだ。汽車をのり違え、四時間も五時間も反対の方角へ行っていたといって、げっそりやつれて療養所に現われたこともあった。

葛野が癩になったことよって積み重ねたさまざまの苦勞を背負ったまま、母は死ぬのであろうか、その苦勞の一つをも軽くしてやれなかった自分を不甲斐ないと思い、彼は仏壇のまえを離れた。

灰皿がわりに使っていた小皿に吸いさしのたばこをおしつけ、ライターとたばこの箱をポケットに納うと、

「じゃ、おっかさん……」と葛野はきちんとひざまずいていった。「ゆっくりさせてもらったけど、これで……」

彼は膝頭に手を置いて母をみた。小さくなってしまった母は彼のまえに、ちょこんと坐って、皺のなかの目で彼をみかえした。夜は尿器をつかい、

朝ひっそりと尿を便所にすてに行く母を帰省して葛野ははじめて知ったのだ。

「へエ、もう行きますか」と母は柱の時計をふり向いていった。「それじゃ、おうちも気をつけて行きまっせね。お金は用心してもって帰らないといけませんよ。それにかあちゃんが死んでももう帰ってこんでもいいですよ」

母は意外とはっきりした口調でいい、醒めた眼で彼をみた。

「ええ」と頷いて葛野は喉の奥にピンポン玉のような熱い塊がつかえるのを覚えた。産まれて四十年、どのように遠くに離れていても親と子として生き、いつかはふたたび会えるだろうと思って、生活してきた日々だったが、いまお互にこの世で最後の顔を見つめ合っているのだと思うと、声が詰まった。

葛野は首垂れたまま起ちあがり、土間におりると母が小遣錢をしのばせてくれたれたた靴をひきよせた。彼が帰ってきていることを知っていて、兄は遂に姿をみせなかった。

「じゃ、おっかさん……」と喉の奥のつかえたものに邪魔された声でいい、微笑しようとした顔を歪ませた。

「へエ、それじゃおうちも……」といって母は膝に手を置いて葛野に別れのお辞儀をした。そして彼が玄関の閤をまたごうとしたとき、母は追うようにあがりがまちに這い寄り、

「忘れものはありませんか」といって首をのばし、葛野の後姿に目線を縫らせてきた。

カツカツと靴音が鳴った。北風がつよく吹いて彼の顔を打ったが、

葛野はもっと冷い風がほしかった。ふたたびは踏むことの許されぬ道であった。

兄の家の炊事場の明りをみやって彼は車の往来する道に出た。ホテルに行くらしい車が目のまえを通りすぎた。彼は鞆を道路におろし、たばこを点けた。こうして故郷の街をみるのも永遠に最後なのだ。

紫煙を肺いっぱい吸いこむと、街は眼下にあった。港には大型タンカーと、昨日入港した豪華客船の船影がみえ、灯影をひきながら小船がその間を動いていた。

ふり向くと青白いホテルの光の下に、母のいる家が小さく傾いていた。家の窓からはオレンジ色の光が洩れている。母はあの家でやはりちよこんと坐っているのだろうかと思うと、葛野勉はとんで戻りたい思いにとらわれた。それでも彼はそんな思いを抑えて鞆をもつと、後退りしながら、そろそろと手を上げ、さようなら、と声に出していつてみた。

海鳥社「鼻の周辺」 1996年刊

<http://www.kaichosha-f.co.jp/>

皓星社「ハンセン病文学全集・第2巻」 2002年刊

<http://www.libro-koseisha.co.jp/>